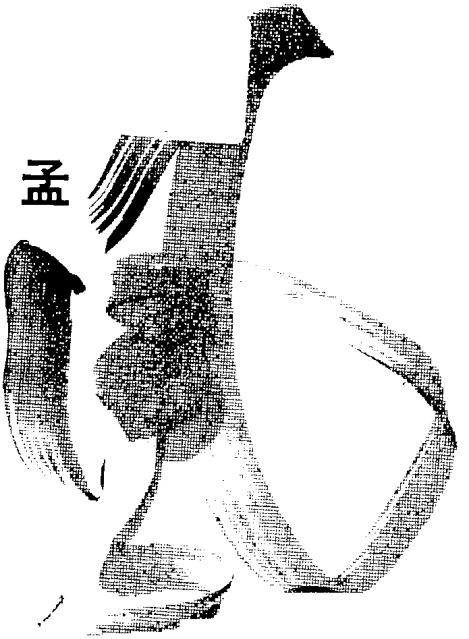
からつ風と涙

田村 孟

孟

風と涙



TBSブリタニカ

田村　孟（たむら　もう）
1933年，群馬に生まれる。
東京大学文学部卒業。松竹大船撮影所助監督を経て，フリーのシナリオライターとなる。「キネマ旬報脚本賞」「毎日映画コンクール賞」受賞。
主なシナリオ『少年』
『儀式』
『青春の殺人者』

からっ風と涙
1979年7月10日　初版発行

著者――――田村　孟
発行者――――吉田　稔
発行所――――株式会社ティビーエス・ブリタニカ
東京都千代田区三番町28番地1　秀和三番町ビル
郵便番号102　電話（03）230-0311
振替東京1-131334
印刷――――祥文堂印刷所
製本――――小高製本

©Mou Tamura, 1979
0093-100051-4968
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目

次

一家離散 5
馬庭家の女中 22
動揺 40
母の出奔 56
恋のさや当て 75
家出 93
行き違い 115
波乱 136
三つの結婚 157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

開店　178
肉親の絆　193
父の死　209
出征　226
マンドリン　242

ジャケットデザイン／中野智雄
書／児玉光仙

TBS系ドラマ「からっ風と涙」より

一家離散

からっ風はいつも西北の方から吹いてきた。

遠いシベリアの野で凍った風はいくつもの山や高原を越え、青黒い冬の海を渡り、日本列島の背骨をなす山脈に当たって雪を降らせ、風はそのまま山脈の向こう側に雪崩れ込むように吹き降りた。

郡馬県下仁田付近ではからっ風は荒船山の方から吹く。まともに向かい合ったら目もあけられず息もつけないような強い風である。空には浅間の火山灰の土埃が吹き上がり、沙を張ったように太陽の光がさえぎられる。桑畑やこんにゃく畑の間に点在する農家は舞い上がる土埃の下で戸を閉ざして蹲り、風の煩むのを待っている。毎年十二月から春先まで、特に辛い季節である。

しかし伸子はこの風が嫌いではなかった。普通にはいやだと思う風である。でも、もしもこの風が吹かなかったら、胸の痛くなるような故郷への愛着はもっと薄いものになっていたかもしれないと思うのである。

顔を、手足を、鞭のように打ち叩き、髪を吹き千切らんばかりに吹く風の中で、面を上げ、風に向かって歩く。

伸子はそれが好きだった。そしてそれは悲しくても辛くても全身でそれにぶつかっていく彼女の生き方によく似ていた。

昭和二年正月、上泉伸子は製糸工場で有名な富岡の鏑川高等女学校の寄宿舎にいた。

冬休み明けの土曜日、一人の中学生が人気のない女学校の校門の中へ駆け込んでいった。

珍しく風もないこの日、空は穏やかに澄み、冬の午下りの明るい陽差しが古い木造校舎に囲まれた校庭いっぱいに広がっている。

駆け込んで来た中学生の足が次第にのろくなり、やがて止まった。胸毛をふるわせて鳴く小鳥の声のようなマンドリンを合奏する音が低く流れてくる。その音の方向を耳でとらえると、彼はそっちに向かってまた走った。

音楽室の中では十数人の女学生が、指揮をする若い音楽の教師藤井を半円になってとり囲み、モーツァルトのメヌエットを弾いている。藤井の手は典雅なメロディーの流れに乗って揺れ、生徒たちは酔ったように頬を紅潮させてその手の動きを目で追った。

そんなグループの中心にいて伸子はみんなをリードするように弾きながら音楽に陶酔していた。

前の年の暮れも押し詰まって大正天皇が崩御され、国全体を覆っていた暗い気分も、年が明けるといよいよ昭和という新しい時代が始まる期待の前に薄らいだせいか、今日の弾き初めはことに新鮮な気分だった。

魂が音楽の中に快く溶けていくような一刻が流れてゆく。
「こら、だれだ！」
ふいに藤井が窓の外へどなった。
一人の中学生が背伸びして室内に小さく合図しているのに気づいたからだ。断たれたように合奏がやんだ。
「昂(たかし)ちゃん！」
窓を見て伸子は中腰になったが、
「知り合いなのか、上泉君の」
藤井の男にしては美しすぎる目を向けられて、
「弟です」
と頬を染めてぶっきらぼうに答えた。
音楽室の外へ出た伸子は、昂を校舎と校舎をつなぐ渡り廊下の方へ引っ張っていった。昂も伸子と同じように富岡の中学の寄宿舎にいるので休みの時以外顔を合わせることはめったになかった。その弟が、来たこともない女学校に姿を現わしたのだ。胸騒ぎを押えて伸子は昂を見た。
「どうしたん？　急に」
「おやじが来た」
「いつ？　いつのこと？」

「朝、寄宿舎の食堂でめし食ってたら、窓んとこから、じいっとのぞいてるんだ」
「もしかしたら……お父っつぁん……別れに来たってこと？」
「ああ。おれがとび出してったら、昂は男なんだから堂々と生きてけ、わしはしばらく世間さまから姿を隠すけどって」
伸子はとっさに返す言葉を知らなかった。胸の中には――やっぱり――という声が叫びになって、ガンガン響いている。昂は無言でいる姉に訴えるように言葉を継いだ。
「お父っつぁん、それだけ言うと神社の森につないであった馬に乗って、後も見ずに行っちまったんだ。姉ちゃん、おらあちはぶっ潰れたんか？　破産しちまったんか？」
「そうかもしれない。私、今度の土曜日、家へ帰ってみる。だからそれまで、昂ちゃんは落ち着いとくれ」
中学をやめなければならないだろうか、と不安気に言う弟をなだめて寄宿舎へ帰すと、少しの間伸子はそこに立っていた。この正月休みに帰った時、何事もないようにニコニコしていた父母だったが、家の中に漂っていたなにか切羽詰まった空気は、伸子を何度か得体の知れない不安な気持ちに追い込んだのだった。――やっぱり――伸子は家の中の不幸を自分や昂に覚らせまいとした父や母の心を思って胸がふさがった。しかし父はなぜ弟にだけ別れを告げたのだろうか……？
音楽室に戻った伸子は、室内の空気が急に華やいでいることに気づいた。振り向くと去年卒業した馬庭久美（まにわくみ）が美しい振り袖姿で伸子の方にあでやかな笑顔を向けてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「伸子さん、いま少林山のダルマ市にみんなを誘ったの、クラブのリーダーとしてあなたからも先生にお願いして」

久美がよく透る声で言うと、生徒たちはわっと喚声を上げた。

「困りますねえ、卒業生が後輩を誘惑しに来ちゃあ」

藤井は言ったが、練習も一段落していたので久美の提案通り一同はダルマ市に行くことになった。伸子は本当ならいま一人きりになって家のことを考えてみたかった。のんきにダルマ市など見物して歩く心境ではとてもなかったが、幼い時、父に肩車されて市を見たことなどが思い出され、ふと一緒に行ってみようという気になった。混雑する人ごみの中で、父はあの時、

「おらあちの宝物を、ぺしゃんこにしねえでくれやあ」

と大声でどなって、自分をかばってくれたものだった。その父が自分とは一言の別れの言葉も交さず、姿を消したということが伸子には悲しく、納得もいかなかった。少林山の群衆の中に昔の父がいるような気がして、伸子は久美たちと一緒に出かけることに決めた。

しかし、せっかく出かけたダルマ市だったが、まだ市をろくに見ないうちに伸子は、女学校で行先を聞いて後を追って来た父の家の百姓番頭をしている小沢捨六につかまった。捨六の話によると破産して父が家を出たのはやはり本当のことだった。広大な田畑も山林もすべて人手に渡し、それでも返済しきれない借金が山ほど残っているという。

「あと仕末とこれからのこんで、大旦那とおかみさんの考えが食い違っちゃって……」

「私、すぐ帰る」

伸子はそう言うと藤井に断って急ぎ足で市の雑踏を抜け出した。

上泉伸子は、郡馬県南部を走る上信電鉄の終点の下仁田から、更に五里近い山道を登った奥牧という村の、数代にわたる山林地主の家に生まれた。

冷たい霧が湧くように渦巻いて流れ、陽が翳ると深い藍色に沈む山峡に堂々とした構えの広い家は、柱も家具も、夏も絶えることない炉の煙に燻り黒光りしている。

祖父の繁太郎は青年時代自由民権の闘士であったが、かつての烈しい気性は、歳月に洗い流されたように影を秘め、闘士の名残は足に残った鉄砲傷だけという穏やかな老人になっていた。

しかし、息子の文太郎が、下仁田と信州の間を結ぶ鉄道の開通に村のために奔走し、家を顧みなくなってからもう四年もの月日がたち、次第に家が傾いていっても少しも動じることはなく、金儲けのための事業に失敗したのとは違う、と胸を張って伸子の母や二人の孫たちを励ましていた。

伸子は常日頃、祖父の言葉を素直に受け取っていたので、いよいよ来るべきものが来ただけだと冷静だったが、彼女より少し遅れて寄宿舎から戻った昂は、家財の持ち出された家の中を見回し、

「おやじみたいのを鉄道ばかって言うんだ。鉄道が通りさえすりゃあ、世の中がバラ色に変わるなんて思い込んで、手弁当で陳情だ請願だ……あげくの果てに身上をぶっ潰して夜逃げして……」

と握りしめたこぶしをふるわせるのだった。伸子にとってなにより大きなショックは、借財の取り

立てが実家に及ぶのをおそれて、父が母を離縁してしまったことだった。道具の持ち出されたガランとした納戸の隅で泣いている母の紀代を伸子は慰める術がなかった。信州小諸で、大きな味噌の醸造業を営む家の末娘として生まれ、嫁いで来る時は荷車や人夫を行列のように連ねて来たというのが自慢の紀代は、心の中がいつまでも若い娘のような女だった。母に別れる伸子や昂、嫁に残される繁太郎たちの寂しさや悲しさより、離縁される自分の身の辛さだけでいっぱいになっている。その夜遅く、昂が寝入った後で紀代は提灯をともし、伸子にだけ送られてひそかに上泉家を出ていった。

遠ざかる提灯の灯が真っ黒に聳える山の中腹をチラチラと見え隠れしていくのを、伸子は戸の外に立っていつまでも見送っていた。頼りなげに揺れる小さな灯が、母の運命のように見え、哀れさに涙が頬を伝った。母への憐れみで自分の悲しさを心の底に押し込め、目をつぶり通していることに伸子は気がつかなかった。

父も母もいない家で、祖父と伸子の生活が始まった。昂は伸子に「男の子は勉強しなくちゃ」と説得されて寄宿舎に帰った。家を出る前紀代は昂を実家へ連れて行き、兄に学資を出してもらって小諸の学校にやるつもりだと言ったが、繁太郎は、

「昂はこの上泉の跡取りだ、それに昂が向こうに行けば借金取りに、どうぞこちらへっていうようなもんだ」

と許さなかったのだ。伸子は昂に学校を続けさせるために、自分が学校をやめて働く決心をし、退学届を書くと昂に女学校へ持たせてやった。父も母もいなくなったこの家で自分がしっかりしていかな

くてはどうなろう。上州名物は〝かかあ天下〟と言うけれど上泉の家は〝娘天下〟にならなくてはとしゃんと背筋を伸ばす思いだった。

伸子の退学届を昂が女学校へ出した翌日、昼のお茶を沸かそうと裏の畑から戻った伸子はだれもいない家の縁先に所在なげに腰かけている藤井を見てびっくりした。

「先生！」

「よかった。さっきから待ってたんだが、君に会えなかったらどうしようと思ってね」

「わざわざ来てくだすったん？　私のために」

「うん。奥牧村ってのは遠いねえ。青倉、月形と村二つも通り抜けて……長野県のほうが近いっていうのが実感としてわかるよ」

藤井は伸子に退学の決心をひるがえさせようとしてやってきたのだった。彼は卒業まで一年と少ししかない伸子の授業料や寄宿舎の費用を負担したいと言う。そして、びっくりして辞退する伸子に熱っぽく話し出した。

「ぼくは君の人柄が惜しいんだ……昨日、伸子さんのいないマンドリンクラブで練習してた時……自分の気持ちがはっきりわかったんだ。学校へ戻ってくれないか。そのためだったら、ぼくはなんでもする」

「ありがとうございます。だけど、私、もう働くって心を決めてしまったから……」

答える伸子に藤井は近寄って肩に手を回した。一瞬、伸子は自分になにが起ったのかわからなかっ

た。次の瞬間、はっとした彼女が思わず藤井の腕をすり抜けようとしたのと、藤井が彼女をつきはなしたのとほとんど同時だった。わざとらしい咳払いが聞こえて捨六が現われたのだ。

「どこのお方が知らねえが、いい天気だのう」

捨六ににらみつけられた藤井がしどろもどろに名乗ると、捨六は女学校の教員が教え子の家へ来て恥ずかしいまねをしていいのかと絡み、その場にいたたまれなくなった伸子がお茶をいれにいった隙に、家の横に藤井を引っ張っていって、

「お嬢さんをなんだと思っているんだ」

と土手の下につきとばした。戻って来た伸子は捨六が意気揚々と、

「お嬢さんあの教員だら追い帰してくれたぜ！」

と言うのを聞いてあわてて藤井の後を追ったが人気のない道に吹いてきた風が土埃を巻き上げているだけで、ついいまし方、彼が自分の目の前にいたことがまるで嘘のようだった。

学校に戻れといった藤井の言葉が愛の言葉だったと言うことを伸子は噛みしめてみる。そして働くと答えたのは彼の愛を断ったことになったのだと思うと寂しかった。この四年間マンドリンに打ち込んでいたのも藤井への憧れが大きかったことを伸子はいましみじみと思うのだった。

藤井を追って、夢中で駆け降りた山道をのろのろと上がって来た伸子は、家の囲炉裏ばたで祖父としゃべっている見慣れない中年の男と二人の若い男を見た。

中年の男は馬庭善七といい、下仁田でこんにゃく原料問屋をやっている。馬庭の店は、大地主や生

糸商が土地の物産であるこんにゃくに目をつけ仲買いを兼業で始めた店とは違って、主人の善七と妻の徳子が番頭と女中から叩き上げて築いた業界百軒の中で三指に入る大商店だった。二人には子供がなく、夜中まで働き過ぎて子供を作り損ねたと冗談半分の陰口を叩かれていたが、徳子の姪久美を養女にし、その婿に跡を継がせるらしいと噂されていた。

久美はマンドリンクラブに来てみんなを少林山に誘った例の先輩だったが、藤井に熱を上げていると女学生たちのもっぱらの噂だった。

馬庭善七が伸子の家にやって来たのは、上泉家が破産したと聞いてこんにゃくを安く買い叩くためだった。あけすけな彼の言葉に繁太郎はそれではまるで死人にたかる青蝿だと非難する。善七は顔の前で手を振って、実はここにいる二人の息子に商いの有様を見せたかったからだと言い出した。彼が伜だと言う二人の若者は善七がそれぞれ違う女に生ませた、妻の徳子にとってはなさぬ仲の子だった。どちらも年は二十才で、長男の一太郎は炭焼女、次男の雅七は芸者の子だった。

善七は歳のせいか、久美が家業を嫌っていることを知ったせいか、いままで顧みなかった二人の息子のことをしきりに思い出し、家に引き取ってこの商売を継がせたいと考え、徳子にはないしょで連れ歩いているのだった。

伸子は紹介された二人の若者が兄弟とはいえ、まるっきり違った性格の青年であることが物珍しく思われた。それほど遠くない将来に、彼女はこの二人の若者と深い縁でかかわっていくとは夢にも知らず、乞われるままに彼女は一太郎に繁太郎の猟銃を見せた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com